鶴居村教育委員会タンチョウ自然専門員
音 成 邦 仁

デントコーン畑の追い払い活動

毎年デントコーン播種時期になると、まいたばかりの種や出たばかりの芽をタンチョウが食べてしまう問題が起こります。村野生鳥獣被害対策協議会では、食害防止対策として畑に飛来したタンチョウに向かって歩いて近づき畑から追い出す「追い払い活動」を実施しており、趣旨に賛同いただいた十数名の村民にご協力いただきました。

デントコーン畑(以降畑)は、播種した上にビニールを張るマルチ畑と、直播の露地畑があります。マルチ畑は早いところで4月下旬から、露地畑は5月中旬頃に播種が始まります。給餌が終わった4月以降も酪農地帯に居残る、主に1～3歳の若鳥の群れにとって、給餌場でまかれるえさと同じ「デントコーンの種」は格好のえさとなります。

マルチ畑内に飛来したタンチョウの群れ

マルチ畑に残ったタンチョウがつついた跡
（黒枠内）

マルチ畑では彼らの学習能力を目の当たりにしました。種はビニールの両端にまかれており、そのあたりには細かい切れ目が無数に開いているのですが、見た目にはどこに種があるのかわかりません。しかし、播種直後から切れ目のあたりを無作為に突き、種をほじくり出していることがわかりました。マルチ畑の芽が生長し食害の心配がなくなるころ、播種・生長の遅い露地畑で食害が始まります。若鳥たちも生きていくのに必死で、執拗に畑にやってきます。追い払ったと思ったら同じ畑内に降りてしまうこともしばしば。なかなか手ごわいです。こうして約1ヶ月間にわたり追い払い活動が続きます。

かれこれ20年以上にわたり食害対策は行われていますが、いかに効率よく食害を防止するかが今後の課題です。追い払い活動は人員の確保の問題等、限界があります。一方で、畑内にきらきら光るテープを巻き付けた棒を立てたり、ドローンで追い払ってみたりと、いろいろな策を試し、それなりの効果が確認されました。さらには播種のタイミング等、農家さんの工夫や配慮で食害を軽減できる可能性があります。食害の軽減を図ることは「タンチョウと共生する村」として避けては通れない課題です。対策実施者と農家さんとの情報交換や対策の検討の機会を持って、一丸となって活路を開きたいものです。